

申請者	学科名	造形デザイン学科	職名	教授	氏名	助川 たかね	印
調査研究課題	大規模公開オンライン講座（MOOCS）の課題と著作権処理、その実践的活用提案						
交付決定額	240,000円						
調査研究組織	氏名		所属・職		専門分野		役割分担
	代表	助川たかね	造形デザイン学科 教授		経営戦略 都市計画・ デザイン		全体計画管理・実施
	分担者						
調査研究実績の概要	<p>1. MOOCSと大学教育</p> <p>大学間競争にあらたな脅威が現れた。米国東部から始まった大規模公開オンライン講座（MOOCS：Massive Open Online Courses）の急成長である。世界の有力大学を含む講義提供機関と受講者の数は急増し、一般、AOに続く第3の入学機会となりつつある。一方、デザインの現場では技術やマネジメントの高度化・グローバル化が加速し、人材育成手法にも変化が迫られている。</p> <p>2. 研究の概要</p> <p>本研究では、MOOCSの教材として先行研究でも調査対象とし、リアルタイムで実現の過程を追ってきた韓国ソウル市の東大門デザインプラザ（DDP: Dongdaemun Design Park & Plaza）と東京の新国立競技場を取り上げた。世界的建築家ザハ・ハディド（Zaha Hadid）が描く複雑な曲線を持つ建築およびランドスケープで構成されたDDPは度重なる工期の延長の末2014年3月に完成した。その建築意匠とスケールのため設計・施工過程の革新を迫られ、世界各国の専門家が集められ通常の公共建築プロジェクトより遥かに複雑かつ国際的な組織運営が要求・実行された。日本から最も近く類似点も多い海外都市で実現したこのプロジェクトを調査することにより、今日のデザインプロジェクトで想定され得る限りの課題が抽出でき、デザイン教育に向けたデータの蓄積が可能となった。折しも、ハディドは日本でも国立競技場の議論で注目されているが、その難易度の高さゆえに「unbuilt（実現しなかった）」プロジェクトも多い。新国立競技場について予想される課題にDDPから抽出したデータを応用することで、臨場感あふれる講座の開発への応用を目指した。</p>						

<p>調査の実績 の概要</p>	<p>3. 調査研究計画 本研究は、助成決定額を鑑み当初の研究計画を変更し、今年度は①～④を実施対象とした。③については、継続課題となった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 米国MOOCSに加え、JMOOCSなど国内大学も参画するMOOCSの実態調査 ② 韓国延世大学教員の協力によるDDPおよび非英語圏でのMOOCS参画実態調査 ③ ①②における著作権処理の課題と対応に関する調査 ④ ①②に基づく、国内大学（OPU）での活用可能性の検証 <p>4. 考察 MOOCSの試行には既存科目の「社会調査論」を利用した。他大学で開講されているMOOCSを調査したところ、学生の習熟度を測る方法としては課題の提出によるものが多い。しかし、提出されたものが、本人が制作したものであるかどうかが見極めることすら困難な状況である例も報告されている。ここで活用したのが反転授業である。予習のために課題を出し、教室はそれを発表・応用させる場所へと定義づけた。この授業形式は既に導入済みだったが、MOOCSを模索する過程で動画配信による反転授業の利点を確認できた。「マーケティング」でも学生には特に伝えることなくMOOCSを前提にした反転授業を導入し、全学的な導入も可能であるとの確認ができた。</p> <p>5. 結論 MOOCSについては国内の各大学でも独自のシステムを開発し始めている。しかし、その運用方法と教育の中身を数多く見て行くと、動画配信という点を除けば従来の通信教育と大差のないシステムへと逆行している例も多い。AO入試が日本で始まった際十分な検証がなされず、本家米国のそれとはまったく異なる入試制度として定着してしまったようにMOOCSについても教育の質保証を担保できない制度として定着する恐れがある。授業の質を向上させ、意欲や能力の高い学生を獲得するためには、動画配信による反転授業の位置づけを明確にすることと、そしてMOOCSならではの多様性と広域性をもったケース事例を恒常的に探し教材化できる体制が必要である。</p> <p>6. 期待される成果 MOOCSについては既に多種多様な問題点が指摘されている。その動きは本研究の進行とほぼ時を同じくして出尽くした様相を示している。一方で、授業発信力による効果を見れば、活用方法次第で、地方大学にとっての学生獲得システムとなる可能性も持っている。建築・工業デザインなどデザインプロジェクト分野では、マネジメントに求められる能力も大きく変化しているが、現実にかかる様々な課題に対する解決能力を涵養する教育方法が整備されているとは言い難く、複合的課題に対応する教育の充実は世界共通のジレンマでもある。</p> <p>本研究で目指すMOOCS型授業は、その状況を逆手に取り、最終的には大学や地域を越えて多様な人々が受講できる環境を活かし、デザインマネジメントの課題に共通性と多様性をもって取り組ませるものである。また、デザインには「視覚化」できるという強みがあり、それを媒介にすることで、多様な受講者をひとつの目的に向かってナビゲートする助けとなるはずである。さらに、時間と場所を選ばない学びの機会を創出する契機とすることで、学内人材の効果的活用にもつながるものと期待する。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>研究計画の通り継続中のため、特になし。</p>